

大陸（南支）

湘桂作戦 末期の体験

石川県 村井藤一

長い行軍の後、やっと目的地の柳州である。高い丘と平地の連なる中にある部落に、一月の夜行軍の末、ようやく目的の迫撃第一大隊の駐屯地に到着した。すぐ各中隊に配属が決まり、私は大隊本部中隊第一小隊に決まった。その小隊の初年兵は五・六人だったと思う。

初年兵の教育係の兵長が訓示をしたあと、気合を入れると頬の腫れる程殴られたが、とてもいい人で優しく面倒見が良く、その後は殴ることは一度もなかった。部隊のほとんどの兵隊は、四、五

年を野戦で過ごして来た人達だが、一般に人柄の良い兵隊が多かった。

しかし、戦場で四年も五年も頑張っていると聞くと、今から先、我々は何年無事過ごせるか心細く、淋しい気持ちになった。古い兵隊の語るには、長い戦場ですごしてくる間にいろいろな体験をしているし、時には身も凍るような場面にも直面したり、非人道的な経験もした。今でも時々怨霊のせいか寝ていると、体の上から押さえつけられ、身動きできない金縛りになると、話してくれた古い兵隊もいた。

私はズボラな兵隊だったと、自分では思っていた。性格的に堅苦しい事が嫌いで、軍律に縛られるのが余り得手ではなく、要領のよい兵隊だった。

宿舎の二階は物置のようになっていて、ガラタが置いてあり、中に中国の小学生の教科書などが散乱している。手に取って見ると徹底した日本批判の漢字が並んでいて、排日の文字で埋めてあった。いかに中国が、日本を嫌い恨んでいるかの認識をあらわにするものであった。

入隊してから一年程経った時、初年兵の昇級の発表があった。同時入隊した者の中で、二、三人が一選抜の上等兵になった。先輩の兵隊が「お前も、もう少し頑張って早く昇級しろ」と力付けてくれたが、私はどうでもよかった。

迫撃砲の部隊は軍馬に迫撃砲を分解して乗せて行動するので、軍馬は大事な兵器で、兵隊より大切にされた。その当時は、兵隊は二銭の葉書一枚で召集できるが、馬は高価であった。

私は、軍馬の世話係を命ぜられ、先輩の兵隊に教えられて、毎日馬屋に詰め、馬の面倒を見た。朝・昼・晩と、水を飲ます事を「水飼い」といつ

て馬が喉を鳴らす回数を数えて記録し、朝、寝糞を掃除して新しいのと取替え、飼葉を与えて食欲の具合、水の飲み具合などを注意して、体の病気などの発見に神経をつかった。

また、小さな馬がいて「チャン馬」と呼んでいたが、結構力があり、よく乗って遠乗りをしたことがあり楽しかった。小隊付の古い軍曹がいて、芋で蒸留酒を作っていた。大隊の幹部連中に差し入れをしていたのだろう。

軍隊が天国のような毎日、少々のデタラメも陰で通用、軍律も、軍規もないような世界もあった。

腹痛で軍医に診察して貰ったが、薬も無いので、炭を固めたような物をくれた。「多分蛔虫だろう」と言われた。古い兵隊が「それなら良い方法がある。梅檀せんたんの皮を丸一日煎じて飲むと必ず治る」と教えられたが、どれが梅檀の木か知らないが、木の皮をこれらしいと判断して、皮を剥ぎ土鍋で十時間程煎じて、少しにがかったが飲んだ。便意を

催して、夜だったが、蛔虫が拳程の白い塊で出た。嬉しかった。

本部にいるといろいろな仕事があった。上官の命令で部落民を使って畠の仕事を監督するよう言われ、現場に行つて見ると、二人と聞いたが、中学生位の子供が一人いて仕事にならない。少し耕させて後は時間つぶしに筆談で話をした。

家族のことや、戦争の事や、学校のこと等々、種々のことを聞いて見たが、結構明快に答えた。それなりに勉強していると感心した。

私が初めて歩哨についた時、衛兵所に部落の副区長がスパイ容疑で監禁されていた。明日処刑されると聞いたが、本人はいたって平然としている。死んでも必ず生まれ変わるといふ樂觀的な宗教観、人生観を信じているそうである。夕方、女二人が木をくりぬいた大きな柄杓子に高粱の酒をなみなみに入れて容疑者に差し入れに來た。二人の女は妻であると聞く。この辺は一夫多妻であった。

夜中に立哨の順がきて、營兵長から、「居眠りし

ないで、よく注意して監視しないと、敵は匍匐して攻めて來るから油断できない。暗い中での立哨だから万が一のことがあると大変なことになるから」と言われ、緊張して任務についたが、体が疲れているから、つい、ふらふらとする。驚いて前方に注意を向ける。そのうちに交替が來て安心する。

翌朝の点呼の時「今日はスパイの処刑が行われる。チェッコ機関銃で銃殺するから希望者は処刑場行きを申し出よ」とのことだったが、その時間には馬小屋勤務中に「ドド…」と機銃の音が聞こえた。顔を前日見ているから、なんとなく可哀想な気持ちになった。

小隊付の年輩の軍曹がいて、よく、私をかばってくれた。作業中眼鏡が壊れて不便で困っていた。軍医が会っても私が敬礼しないと軍曹に小言を言ったが「近眼で良く見えないのです」と眼の話をしてくれた。また何かと体に気を付けてくれ嬉

しかったので、今でも感謝している。

戦況はだんだんと不利になり、向こう側の山に中国軍が陣地の構築を始めた。後方からの物資の補充が少なくなり、あらゆる物資を現地調達をしなければならなくなって来た。

軍の兵站部へ軍需品の受領に、大隊で馬十七頭に警備の兵若干名の編成で出発した。私も命令で、操作したこともない戦利品のチェッコ機銃を持たされ不安だったが仕方なしに参加した。緑の豊かな山の中を進んだ。長い登りの峠道に差しかかった。軍馬十七頭だとかなり隊列が長い、ちょうど山林から抜けて坂に差しかかる所で、突如峠の稜線から米軍機が八機、轟音と共に頭上をかすめる。隊は算を乱して脇の山林の茂みの中に馬を引き入れる。暴れる馬もいて大変だ。

私は幸いに先頭の方において、敵機が旋回反転して攻撃しに来るが崖の下に身を寄せて安全だった。八機が低空で一斉に機銃掃射、バリバリバリバリ

と地面を撫でるように過ぎて行く。と思う間もなく、また旋回して、バリ、バリ、バリバリと地面を撫でるように過ぎて行く。連続で八回も機銃掃射が続いた。

一頭の軍馬が道路を走り出したが、すぐ目標になつて、無残にも敵機の餌食になつた。一人の老婆が道路脇の溝にちぢこまっていたので、助かってよかつたと思つた。これで軍需品の受領が中止となつた。

あとで先輩の兵隊が青くなつて「崖の上において恐ろしかった。自分の体の三十センチの所に大きな弾の跡が並んでいた」と話をしていた。その後、近くの部落で夜まで休んでいたが、体がずっと震えていた。部隊は夜行軍で本隊に帰つた。

その後、電話線の盗まれた場所へ調査を命じられ出発した。本部士官一人、下士官一人と兵二人で出発する。こんなことで、何かある度に出動したので、苦勞の連続であつた。

その後、第十一軍司令官の視察があり、ちょうど私が立哨の時間にあたった。私は眼鏡もなく、軍司令官の通過の時は「捧げ銃」をしなければならぬ。心配していたが、乗馬で軍司令官を囲むように来たので事なきを得た。

その後、迫撃砲の射撃訓練を視察されるとのこと、一つの砲に五人が射手として、砲を囲むようにして並ぶ、そして号令に従って砲を撃つ。私の次の番の砲が弾丸を砲口から入れたが、不発である、その弾丸を抜かねばならない。控えの私が砲の筒先に廻って弾丸を受け取るのだ。二人が砲身を静かに逆さまにし、スルスルと出て来た弾を無事受け取ることができホッとしたが、何分にも初めての体験であったので、後に、五人が「よかったなあ」と笑い合ったが、実の所、「正直言つて恐ろしかった」と笑い合った。

戦況は日増しに不利となり、武器・弾薬・食料・被服・医薬品等の軍需物資の補給がほとんど無く

なる。それに反し、中国軍は米国製の新式の兵器で装備して攻撃力をつけて来た。

状況の変化に伴い、昭和二十年七月に反転作戦が始まった。毎日の夜行軍が続く。軍馬を曳いて山道を行軍中、向こう側の山腹より突然敵の機関銃がダツダツと連続射撃攻撃を浴びせて来た。夜の闇の中で発射している場所から赤い閃光が走り、弾が頭上をヒュン、ヒュンと音を立ててゆく。すぐ我が軍の機関銃も応戦をはじめた。

私は不思議に落ち着いている。以前の攻撃の時は震えるが、怖さが消去したのだろうか、しかし、前に行く私の一年先輩の兵隊が「やられた！」とひっくり返った。「どうした！」と声をかけて見ると耳を弾が掠めただけであった。

夜行軍が続く、食料も乏しく青い「なんばん」に岩塩だけの日が続く。たまに、珍しい乾燥した味噌汁、今のインスタント味噌汁だが、少し油くさくて不味い。

夜行軍の中でも、今当時を思い出して班長の名

前は忘れたが東北の人だった。この班長は感謝しても、感謝しても足りない位の命の恩人だ。班長は、班内から落伍者を出すのは恥と、軍人特有の軍規を守っただけかも知れないが、私には、今日あるのは、この班長のお陰だと喜んでい

る。鉄道線路を行軍している時、突然、猛烈な腹痛におそれ歩くどころの状態ではなかった。余りの痛さにうずくまり、体をくの字に折り曲げていると班長が叱り、こんな所に取り残されると敵兵に襲われて殺されるぞ、我慢して歩けと怒鳴るが、痛さにもうどうなってもよいと自棄になり「置いていってくれ、迷惑だから」と頼んだ。

班長は私の腕をグッと抱き上げて歩きだした。私は体を二つ折にして息も絶えだえに歩き続けた。班長の腕の力とスタミナが私を救ってくれた。どれほど歩いたかはつきりしないが、少しずつ痛みが薄れてきた。夜が明けた時は疲れたが腹痛が治り、夢のような楽な気分になり班長に感謝した。

七月の中頃だから暑い。行軍していても水筒の

水もすぐなくなる。小川を見付けると馬と一緒に川水を水筒に詰めて行進する。ある時、余りの渴きに溜り水を飲もうとして軍医に見付きり叱られた。

行軍中遠くに赤い炎が高々と見える。だんだん近づくにつれ煙が鼻をうつ。戦友となにをしているのだろうと話しながら進んで行くと、工兵隊が鉄道のレールをはがして、その枕木を井桁に組んで積み重ね、外したレールをその上に並べて下から火を付けて燃やす。と上のレールが熱で飴のようにダラリと真中から折り曲がり使い物にならなくなる。

敵軍の鉄道による追跡を逃れるための工作だった。そしてこのような工兵隊の工作が、延々と続いてきた。何分退却である。八路軍が追尾して、いつ攻撃されるかわからないのだったが、我々兵隊は何の情報も知らずに行軍していた。

私が面倒を見ていた軍馬が足の蹄にどこで怪我

をしたのか化膿して、手当が遅れたので蛆が湧き共に行軍できないと軍曹が判断し、農家の柱に繋ぎ可哀想だが置き去りにした心が痛む。

激しい雨で道も泥濘み衣服・装備も濡れて重い。宿営地につき炊事の準備をしていると、ドカンと大きな音がする。驚いていると、K一等兵が手榴弾で自殺したと聞き正直無理もないと思った。沼田に入隊した時、同じ班だった。体も小さく部隊に付いて行軍するのがよほど辛かったのだろうと冥福を祈った。

行軍していると、ドンドコドンコと遠くで太鼓の音が絶えず聞こえ、少し不気味な感じがする。道端の民家に宿営するつもりで装具を下ろしたが状況が芳しくないのもたまたま行軍をして宿営した。あの太鼓の音は住民が連絡し合ったり、攻撃の前兆であったりで、現在の反転作戦の場合、非常に不利なことが起こる怖れがあった。

八月二十日に長沙に入り、何かの施設のあとか、

大きな建物の中が宿営地となり、そこで終戦を聞いた。無条件降伏だという。なんであれ嬉しかった。

みんなが、これで地方人だと、負けたことを互いに祝福しあった。何しろ、今から何年、このような苦しい野戦が続くかわからない。一応階級章はつけているが軍隊はなくなった。そして武装解除が行われた。

宿営地の中をぶらぶら歩いていると、軍刀がうず高く積みまれている。勿体無いなあ、あの中に名刀も沢山あるだろうと眺めていた。毎日何もすることもない。銃も剣も取られ、手入れをしなくてもいいから暇がある。

友人四人程で営内を廻っていると、ゴミ捨て場があり、その上に捨てたばかりの豆の煮たのがある。私は何も感じないが、あとの友人達が豆を見て、納豆になっているぞ、自分等も作ろうと相談している。友人達は関東の人間だから作り方を知っているらしい。すぐ営舎に帰ると大豆を煮て土

間に穴を掘り藁を被せて湯を掛けて一晩待った。翌日には中の豆が糸を引き納豆ができていた。私は納豆など見た事もなかったが食物の乏しい時だったせいか旨いと思った。

ボツボツ蚊が出るようになり除虫菊をくべたりしたが、何しろ衛生環境が最悪だ。

「捕虜」となり漢口に向かって行軍が始まった。しかし、マラリアの発熱が途中二回程あった。歩いていても、熱が四〇度近くあり、班長が荷物を積んでいる馬の上に乗るように指示されたが、荷物の上に乗るのでバランスが取りにくく、反って疲れるので馬から降りて歩いた。若いから体力で持ったのであろう。

そんな苦勞をしながら漢口に着く。すぐ原隊を離れて陸軍病院に入院した。その後復員するまで、二度と原隊に復帰できなかった。入隊以来の戦友とも離ればなれになり、音信も途絶えて残念である。

入院して十日ばかり病室にいたが、マラリアの特効薬キニーネも品切れで病室にいただけだった。が幸い症状が出ないので退室して病院の雑役をすることになり、体も元気になった。

雑役でも炊事場の飯の釜の洗う時は嬉しかった。焦げ飯が沢山釜についていて、とても美味くて腹いっぱい食べた。

そのうち病室でコレラが蔓延して次々と死んでゆく。一日十人位ずつ息を引き取り、隔離病棟が無いので罹病すると霊安室に運ばれて行く。患者の心は……。私達雑役は、その死体を埋める大きな穴を掘った。そして、一つの穴に十五体位ずつ埋葬したが、もうしばらくすれば日本に帰れるのにと、やり切れぬ気持ちで、遺品を遺族に送る整理などした。私も、いままじ病室に居たらと思うと寒気がする。まさに命拾いしたと思っている。

しばらくして退院して、漢口の混成部隊に入った。全国各地の人々の寄り集まりで、帰国の情報

が入り乱れて、一喜一憂の日が続く。

揚子江（長江）の川岸に宿営地があり、「捕虜」として中国より日額八十円也が支給され、そのうちの半額が給食費とし、残額を現金で支給された。煙草は「双魚」と名前がついているが専売ではない。街頭で簡単な紙巻機で両切り煙草を作り、粗末な十本入りの箱に入れて売っていた。

しかし、中身は半分は蓮の葉で、一箱二十円であつた。町中でよく蓮の葉をキッチリ束ねて運んでいる人をよく見掛ける。煙草の材料だ。しかし、そんな煙草も貴重品で、よくパイプ作りが兵隊の中で流行していた。材料も桜の木が良いと評判であつた。作る道具も無いが、いろいろと工夫して小刀で削り、石で磨いたり、太い針金で穴を空けたり、結構楽しかった。

また、支給される紙幣は支那の銀行が発行した古いもので、中国銀行はじめ種々の銀行の札で、こんな銀行が今でも残っているのが不思議に感じた。我々は「捕虜」だが、形ばかりの柵が施して

あつたが、出入りも自由で、よく外をぶらついた。

班長が、ある日、伍長から一等兵に格下げになつた。この人に聞くと、自分は幹部候補生で、終戦前に入院したが、退院して見ると同期の者が皆伍長になつていたので、当然、自分も伍長になつていと申告したのだが、実際は入院していて資格を喪失しているとは思わなかつたと語つた。

また、宿営場所が変わると、給食がなく、自分達で飯を炊いた。誰かが、野菜の種を蒔いた畑があり、小さな菜を摘んで塩を入れて雑炊にして食べたりしていた。

毎朝、中国人の警官が来て、作業の指示をした。中国人に指揮されて少し抵抗感があつたが、そんなに厳しくなく、細かなことは言わなかつた。仕事は街中の溝のドブ浚いだ。かなり悪臭がする。泥や糞尿などが溝に滞っている。それを荷車の上に板で囲つた箱の中に積み込み揚子江に運んで捨てる。一回運ぶとしばらく河原で休憩だ。

天気の良い日は、シャツを脱いで、シャツの縫い目のシラミを潰す。シラミは縫い目に並んでいる。時々、衣服を煮沸するが、すぐ取り付く、誰もが苦勞していた。

軍隊は消滅したが、組織は統制上残っている。我々は、終戦から「捕虜」の生活が続く。広島原子爆弾の噂も少しながら入って来て復員してもどうなるかと情報が入り乱れるうちに、昭和二十年も過ぎ、時々、雪の舞う日もある。宿舎が天幕張りで囲い目が荒い筵を下げてある。野宿とあまり変わらない。

夜は携帯用の布団にくるまって寝る。着たまま、軍靴も履いたままだったが、若かったので、よく眠れた。しかし、横になってから、故郷の食べ物自慢話しが毎晩の楽しみになった。帰ったら、こんな物が、あんな物がと次々と想像を逞しくして唾を飲み込み眠りに入った。

そして、小賢しい者もいて、あちこちから情報

を集めて、いつ頃帰れるとか、もうどれだけで船が出るとか、皆一日も早く日本の土が踏みたい思いで、耳を傾ける。ある時、揚子江に行き、飯盒に水一杯汲んで来て、そのままにして置いたら、底の方に一センチ程の泥が溜った。その上水を飲んでんだけどもある。

宿営地の移動で街中を通ると、旋盤を使っているが、電気がないので一人が大きな歯車を廻し、一人が旋盤を操作しているのを見て驚いた。しかし、市内に火力発電所があり、なぜか前にインド人が警備に立っていた。

そろそろ、帰国も近づいた頃、例年になく揚子江の水が少ないという。河の真中あたりに島のように泥の州ができていた。

船で漢口から上海に上陸した。船の中の寝台の部屋で休んだが、夜中に一人が亡くなった人の寝台を見ると、シラミがゾロゾロと床へ降りてくる。

シラミも冷たい所が嫌いで、人が死ぬとすぐ体が

ら離れると説明する者がいた。書き忘れたが、支那人に外套を売ろうと交渉している内、うかうかと、騙し取られた事が今でも悔しい。

上海に着いて二日程して乗船だと決まった時、すごく嬉しかった。これで故郷松任に帰れると思うと夜も眠れなかった。乗船して、船底の広い部屋に積み込まれる。今でも印象に残っているのは、中で飯盒で飯を炊いている者がいた。飯盒を二つ重ねて上の飯盒に米と水を入れ、下の飯盒にローソクを二本立てて炊くのだ。それが感心する程うまく炊ける。人間は色々と場所に応じて工夫するものだ。

戦地に出発した時の港、博多へ不思議に戻ってきたが、疑似赤痢が発生し、博多に上陸したものの一週間、足止めされた。博多の駅が前に見え、後からきた人達が先に、復員列車で次から次へと出て行く。

私達は馬小屋を改造した急造兵舎、そして、手持ちの支那米を食べて過ごした。時々、町へ出て

見ても、復員手当が五百円あるだけだ。

一週間が経ち、いよいよ汽車に乗る時、福岡の駅からの時間が早いからと、山中へ帰る人が、さそってくれて、福岡の駅まで駆け足で滑り込み、汽車に乗ることができた。

【解 説】

体験記筆者は、湘桂作戦に従軍した労苦を記録されている。

湘桂作戦は、あの有名な大陸打通作戦の一環として行われた「ト号作戦」と言われた作戦であった。

大本営は昭和十八年秋以降、中国において湘桂、粵漢線及び南部京漢鉄道沿線の要域を攻略する作戦の研究を行い、その作戦の目的として次の項目を考慮していた。

一 今後日本本土攻撃のため、米航空「B 29」の基地となるべき桂林、柳州を我手に収め本土防衛を完うすること。

二 桂林、柳州付近の確保により将来インド、ビルマ、雲南を経て華南方面に指向せられることあるべき敵の攻勢に対応すること。

等々の検討が行われてきたが、昭和十九年一月に、我が方の能力を考慮して第一項のみに作戦目的を集約して、この作戦実施を決定している。そして作戦の名称は全般が一号作戦で、そのうち京漢作戦が「コ号」、湘桂作戦を「ト号」と呼称することに定められた。

これらの作戦は、第一項目にのみ集約されたとは言え、世紀の一大遠征作戦であった。

中国大陸を南北に縦断すること千五百キロ、うち黄河―信陽間は四百キロ、岳州―諒山間は千四百キロ、衡陽―広東間は六百キロというが、単にこれらの遠征の道程のみでなく、その間の要衝に位置している中国軍を撃破して、錐揉み的な進撃が要求された大作戦であった。

加えて、作戦のための兵力の増員はもとより軍需資材、弾薬、兵器、延長する補給路の確保、

さらに南方の戦況に鑑みて抽出、転用された部隊の補充として訓練、装備に劣った多くの新編成部隊を交えての作戦行動を強いられたのである。

加えて、活発になった敵空軍からの鉄道、橋梁の援護、患者収容施設の拡張などが必要とされ、マラリア、ペスト等の風土病、雨季と炎熱に悩まされる行軍と、部隊兵士の労苦は想像してもあまりあるものがあつたという。

こんな中で、筆者は作戦間の労苦を一兵士の目線で眺めている。行軍中の本人と馬の水飼いや等の世話、迫撃砲射撃訓練、歩哨、そして筆者自身は腹痛に悩まされつつ、激しい雨中の行軍と戦闘における困苦の一端を、次のように記録している。

『戦況は日増しに不利となり、武器・弾薬・食料・被服・医薬品等の軍需物資の補給がほとんど無くなる。それに反し、中国軍は米国製の

新式の兵器で装備して攻撃力をつけて来た。

毎日の夜行軍が続く。軍馬を曳いて山道を行軍中、向こう側の山腹より突然敵の機関銃が連続射撃攻撃を浴びせて来た。夜の闇の中で発射している場所から赤い閃光が走り、弾が頭上を音を立ててゆく。』

かくして昭和二十年八月二十日、長沙に入り終戦を聞くが、しかしここから、マラリアの熱発、抑留の苦勞がありながら、復員まで見た中国を描いている。